

2022年4月17日
宮崎中部教会イースター礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 52 : 7～10

ヨハネによる福音書 20 : 19～23

「平和があるように」

【前奏】

【招詞】 詩編 68 : 20～21

【祈祷】 司式長老

【聖書】 イザヤ書 52 : 7～10

ヨハネによる福音書 20 : 19～23

【説教】 「平和があるように」

<平和はどこに>

今日は、十字架に架けられ、死んで、お墓に葬られたイエスさまが、死者の中から復活なさったことを記念するイースターです。

今日の聖書の箇所には、19 節に「その日、すなわち週の初めの日の夕方」とありましたが、それは今のわたしたちの暦の日曜日にあたります。日曜日にイエスさまが復活なさったので、キリスト教の教会は日曜日を「主の日」と呼んで、集まって礼拝するようになったのです。

さて、復活なさったイエスさまが、はじめて弟子たちの前に現れてお語りになった、その一番はじめの御言葉は、「あなたがたに平和があるように」でした。「平和があるように。」

「平和」。それはわたしたちが常に求めているものです。そして今わたしたちは、「平和」などどこにあるのか。争いばかりで、どこにも平和なんてない。平安などない。そう感じているかも知れません。

今の世界を見ていると、争いばかり、制裁ばかり、競争ばかりで、人は誰かを支配しようとしたり、あるいは排除しようとはばかりしています。

わたしたちの身近な社会の中においてもそうです。日々の人間関係でも、職場でも、地域でも、親戚でも、家庭の中でさえも。わたしたちは互いに破れを抱え、対立し、分かり合えず、平和を見出すことができない。そんな時はいくらでもあるのではないのでしょうか。

そうするとわたしたちは、自分で自分の心を守ろうとします。誰にも心を開かないように、誰にも心をゆるさないようにと、心の戸をかたく閉ざして、鍵をかけて、殻の中で、なんとか自分だけの小さな平和を造り出そうとするのです。

平和。それはいったい、何なのでしょう。

さて、弟子たちも実際、復活のイエスさまが来られる直前まで、「平和」からは最も遠いところにいました。それはそうでしょう。師と仰ぎ、神の子であり、救い主であると信じていたイエスさまが、弟子の仲間の一人に裏切られ、同胞のユダヤ人によって捉えられ、当時その地を支配していたローマ帝国の権力によって、重罪人として、最も残酷な十字架刑によって処刑されたのです。

慕っていた、信じていた方の、苦しみに満ちた悲惨な死。そこにはイエスさまの死に対する、大きな悲しみと嘆きがあったでしょう。

しかし、それだけではありません。弟子たちが恐らく苦しんでいたのは、それぞれが、自分自身もまた、イエスさまを裏切り、見捨てて逃げ去ったということです。そして更には、イエスさまの弟子であった自分もまた、捕らえられて殺されるかも知れないという、自分自身の苦しみや死に対する不安や恐怖もありました。

悲しみと、恥ずかしさと、後悔と、不安と、恐れと。それはもう何とも耐え難い思いであったに違いありません。

19 節に「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」というのは、まさのその心境を良く表しています。彼らは自分で自分を守ろうとして、自分の内側に閉じこもっていた。自分の殻の中に身を潜めて、鍵をしっかりとかけて、心を固く閉ざして、じっとしていたのです。

「平和」など程遠い、どこにも平和の要素さえない、弟子たちはそんな状況だったのです。

でも実は、弟子たちは、イエスさまの復活の知らせを、この時すでに聞いていました。

20 章の 1 節以下には、マグダラのマリアが、イエスさまが葬られたお墓に行ったら、その中にあるはずのお体が無くなっているのを見たと言うので、ペトロともう一人の弟子がそれを確かめた、ということが語られています。しかも、マリアはこの後に復活のイエスさまと出会い、「わたしは主を見ました」と弟子たちに告げたのです。

しかし、誰も、イエスさまの復活を信じていませんでした。イエスさまは十字架に架かれる前から、ご自分が復活なさることも予告しておられましたが、それが実現したのだ、ということ、弟子の誰一人として理解しなかったのです。

彼らにとって、イエスさまの死、そして仲間や自分のどうしようもない弱さ、そして人の命を奪うことができる時の権力者の強さ。これは、圧倒的な現実でした。動かしようのない現実でした。彼らが経験したことは、死の力が、世の力が、弱い、罪深い自分を完全に支配している、と思わせるに十分だったのです。

その中であっては、語られた約束や、他の人の証言や、遺体がお墓から消えていたなどという不思議な出来事。これらは、自分で自分を守るために心を閉ざし、固い殻に閉じこもった弟子たちには、まったく届かなかったのです。

もはや、イエスさまの約束も信頼できない。神さまの御力を信じることも出来ない。神さまの恵みを期待することもしない。

神さまとの関係の破れ。神さまに心を閉ざすこと。神さまから離れること。これこそ、人の罪の姿であり、すべての人間にとって、「平和」から最も遠いところにある状態なのです。

<来て、立ち、語る、復活のイエスさま>

しかしここに、わたしたちがどのように神さまを信じるようになるか。どのようにして神さまとの正しい関係を回復させられるか、ということが示されています。

19 節の後半以下にはこうあります。「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。」

そうです。復活のイエスさまの方から来て、弟子たちの真ん中に立たれたのです。

戸を閉じて鍵をかけた家の中に、どのように入ってこられたのかは分かりません。しかし、確かにあの十字架に架けられて死なれたイエスさまであることは、「手とわき腹をお見せになった」と書かれていることから分かります。つまり、十字架に釘打たれた手と、槍で刺し貫かれたわき腹の傷をお示しになったのです。

ところで、復活の体が、どういう体か、というのはわたしたちの大きな関心事の一つです。

復活なのですから、それは幽霊でも、幻でもありません。聖書の中では、栄光に満ちた朽ちない体、と言われています。そしてわたしたちは、そのことしか知らされていないのです。わたしたちもまた、終わりの日に、そのような復活の体を与えられる。復活のイエスさまに似た者とされる。そのことが約束されています。

しかしその時に、わたしたちもイエスさまの釘跡のように、今ある体の傷がそのまま残るのか。肉体の弱さがそのまま引き継がれるのか。そのように考える必要はありません。

イエスさまは、ご自分のためではなく、わたしたちのために復活なされたのです。ですからわたしたちが、イエスさまが十字架の死から、確かに復活し、生きておられるということ。イエスさまの死によって罪が赦されたこと。わたしたちもまた神さまの力によって復活に与ることが出来るということ。このことをわたしたちが信じ、救われるためだけに。それだけのために、イエスさまはその十字架で受けられた苦しみの傷跡を、あえて、わたしたちに示して下さったのだと思うのです。

わたしたちを救うためなら、ご自分の命をも惜しまず、十字架の苦しみを、死をも、喜んで引き受けて下さる、神の御子イエスさまなのです。わたしたちの救いのために、わたしたちが信じるために、イエスさまはどこまでも心を砕き、あらゆることをして下さるのです。

ですから、復活のイエスさまの方から、弟子たちの中に、入って来て下さったのです。弟子たちが固く閉ざした戸の中に、その不安と恐れと悲しみで閉じこもっている心の中に、イエスさまが、立って下さったのです。ここで、疑いと恐れと不信に満ちた弟子たちが、復活のイエスさまと出会うことが出来たのは、弟子たちが勇気を振り絞って、覚悟を決めて、鍵を外し、戸を開いたからではありませんでした。

そして、「平和があるように」と語りかけて下さった。本当の平和とは、神さまとの間の平和です。神さまと人間との正しい関係、神さまとの良い関係に生かされることです。神さまから離れたわたしたちが、神さまの許に帰ってきて、赦されて、神さまと和解して、受け入れられて、神さまと共に生きることです。これが、本当の「平和」です。

神の御子イエスさまを見捨て、裏切り、神さまの救いのご計画を信じず、疑い、離れ、罪の只中で、そして死の恐怖と絶望の中で、じっとしていた弟子たちです。

そこに、神の御子イエスさまが「あなたがたに平和があるように」と言って下さった。あなたがたの罪を赦そう、と言って下さった。神さまとの和解を得させよう、と言って下さった。あなたがたは、神さまと共に生きる。わたしと共に生きる。

「あなたがたに平和があるように。」これはまさに、罪の赦しの宣言です。なんと一方的な赦しでしょうか。なんと一方的な和解でしょうか。裏切られ、傷つけられ、見捨てられ、殺された方の方から来て下さって、あなたを赦す、あなたを生かす、あなたと共にある、と言って下さるのです。しかもそのために、この方自らが、その罪の責任をすべて背負って、十字架に架かって下さったというのです。

わたしたちの罪の贖いのために死なれたイエスさまの復活は、その罪の贖いが確かに成し遂げられたこと。そして、神さまの御力は、わたしたちを支配しているかのように見える罪よりも、死よりも、遥かに強く、圧倒的なご支配であるということ。

そのことを、復活はわたしたちにはっきりと示し、保証を与えて下さったのです。

わたしたちは、このようにしてしか、救われることが出来ません。このようにしてしか、救いを信じる事が出来ません。疑い深く、弱く、かたくななわたしたちは、復活のイエスさまの方から、来て、閉ざされた心の内に立って下さり、語りかけて下さるのでなければ、信じる事が出来ないのです。

しかし、復活のイエスさまはそのようにして下さるのです。わたしたちの閉ざされた心の内にも来て、立って下さり、十字架の御傷を示し、「あなたがたに平和があるように」と語りかけて下さるのです。

わたしの十字架であなたを赦した。わたしを復活させた神の力で、あなたも復活に与る。あなたに平和がある。神が共にいる。わたしが共にいる。そう言って下さるのです。

「弟子たちは、主を見て喜んだ」とあります。ただ、生き返って良かった！というような喜びではありません。後悔してもしきれない、どうやっても取り戻すことのできない、あの罪を、裏切りを、疑いを、すべて赦されているということ。イエスさまに受け入れられているということ。愛されているということ。そして、死を打ち破る神の力が、本当にあるということ。弟子たちは、イエスさまが神の御子であり、救い主だと、この復活のイエスさまと出会って、本当に、はっきりと、分かった。この方が、本当に自分の救い主だと分かった。弟子たちの喜びは、その喜びなのです。

<外へ>

さて、21 節以下には、イエスさまが重ねて「あなたがたに平和があるように。」と言われて、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」と言われた、とあります。

そう言ってから、イエスさまは、彼らに息を吹きかけて言われました。「聖霊を受けなさい。」

息を吹きかける。これは、創世記で神さまが人間をお造りになった時に、その鼻に命の息を吹き入れられて、それによって人間が生きるものとなった、というところを思い起こさせます。

ここでイエスさまは、弟子たちに息を吹きかけ、聖霊を与えられました。罪の赦しを与えられ、復活の約束を受けた弟子たちに、新しい命を与えられたのです。罪と死に支配されるのではなく、神さまの愛と恵みのご支配に生きる、新しい命です。

そうして、イエスさまは弟子たちを、ご自分の罪の赦しを伝える者として、世の人々に遣わされたのです。弟子たちは、そのようにイエスさまによって罪を赦され、新しい命を与えられ、神さまの平和を与えられて、そこでやっと、戸を開いて、外へ出て行くことが出来るのです。それは、戦うため、相手を打ち負かすためではありません。イエスさまの救いを、罪の赦しを、復活の命を、人々に宣べ伝えるためです。

「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」そうイエスさまは言われました。

これは、弟子たちに人の罪を赦したり、赦さなかったりする権限が与えられた、という意味ではありません。人の罪を赦すことが出来るのは、十字架に架かって罪を贖って下さったイエスさまだけです。

弟子たちは、このイエスさまを宣べ伝えるだけです。そして、伝えられたところであって、復活し、生きておられるイエスさまご自身が働いて下さって、聖霊を注いで下さって、そこで救いを必要とする人と出会って下さる。救いを信じさせて下さる。救いの出来事を起こして下さるのです。

復活のイエスさまは、このあと天に上げられます。復活のイエスさまは今も生きておられますが、天に昇られた後の人々は、わたしたちも含めて、もう弟子たちのように直接お会いすることは出来ません。現代を生きるわたしたちは、その手の釘跡を見せていただくことも、触れさせていただくことも、御声を直接聞くことも出来ないのです。

しかし、イエスさまが遣わされた弟子たちの証しによって、弟子たちがイエスさまを宣べ伝えたその福音によって、イエスさまを信じ、救われる人が起こされていくのです。

そうして、時代も場所も超えて、わたしたちにも、復活のイエスさまが確かに宣べ伝えられたのです。そこに、生きておられる復活のイエスさまが働いて下さり、出会って下さり、聖霊を注いで下さり、救って下さったのです。

弟子たちの証言によって伝えられた、イエスさまの御言葉によって、聖書の御言葉によって、聖霊のお働きによって、わたしたちは見えなくても、復活のイエスさまと出会うことができます。「あなたがたに平和があるように」との御言葉を、確かに聞くことができます。

そして、イエスさまが確かにわたしたちのところに来て、真ん中に立って、共にいて下さること。イエスさまが、罪を赦して下さり、復活の命を与えて下さることを、信じる事が出来るのです。イエスさまが、信じさせて下さるのです。イエスさまが、新しい命を、聖霊を、与えて下さるのです。

わたしたちはもはや、目に見えるもの、世の力、圧倒的な死の力に、支配されることはありません。神さまの力こそが、死の力にさえ勝利していることを、イエスさまの復活によって示されているからです。目に見えなくても、その神さまのご支配こそが、神さまの命こそが、今も、ここで、わたしたちを確かに包んで下さっているのです。

「あなたがたに平和があるように。」この御言葉は、今、確かにここにおいて、真ん中に立っておられる、復活のイエスさまによって、わたしたちに告げられている御言葉です。

この平和に、罪の赦しに、復活の命に、神さまとの和解に、わたしたちは喜んで与りたいのです。そしてまた、この喜びを告げるために、外へと遣わされていきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

御子イエスさまの十字架によって、わたしたちの罪を赦して下さり、御子イエスさまの復活によって、わたしたちにも終わりの日に復活を与えることを約束して下さい、心から感謝いたします。

疑い深く、かたくなで、自分で自分を守ろうと殻に閉じこもっているわたしたちですが、復活の主が来られ、真ん中に立ち、御言葉を下さいます。「平和があるように」と、神と共にあるようにと、わたしがいつも共にいると、語りかけて下さいます。

どうか、その平安に生きる者とならせて下さい。罪や悪や死が支配するよう見える世界にあっても、あなたの愛と、その神の御力こそが、わたしたちを支配して下さい。そしていつも、すべての者に対して、あなたは罪の赦しを与え、悔い改めへと導き、愛に生きることを求めておられることを、覚えさせて下さい。

すべての者に、復活の主の平和があり、神さまとの和解に与り、わたしたち同士もまた、平和と和解に生きることが出来ますように。

復活の主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 325 「キリスト・イエスは」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】 【主の祈り】

【讚美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン